寄贈

震災文庫 7－415

発刊にあたって

1995年1月17日阪神大震災、大きなビルも民家もつぶれるように倒壊し、高速道路も鉄道線路も寸断された街を激しく燃える炎がすべてを飲みつくそうとする凄まじい情景がテレビに映しだされた。大都会が一瞬にして廃墟の街となった。しかし、その街の只中で生命の闘いが続いていた。とりわけ、障害をもつ人たちが凄まじい現状の真っ只中で生命を背負って生きている。私たちも彼らの生命の闘いに連らなれないだろうか。そんな思いを抱いた仲間たちが京都で「被災『障害』児・者支援の会」を結成した。

あの日から2年半が過ぎた。「支援の会」に何らかのつながりをもった人たちは、活動を通してあの出来事がもたらした意味と現実を知らされた。それは単なる街の壊滅でなく、人と人とが長い間かかってつくりあげた地域の崩壊であり、そのことが地域に生きようとする障害者の最大の闘いであることを知った。

3000人を超えるボランティア一人一人が支援活動の中で新しい自分を発見し、再び、自分の生きる現場へと戻っていった。被災地の復興と地域づくりを願いつつ、更に、かかわった一人一人が自分の生きている街においても障害者と共に生きる街づくりに歩みだすことを求めつつ、今、ここに「支援の会」の活動報告をまとめてみた。

障害者いこいの家　めぐみホーム
多芸　正之

02000081800